新體詩林

新体詩林社

彈遞局認可

へ6
4475

4475

社告

一我新体詩ハ曩キニ東京大學教授外山正一同矢田部良吉両先生ノ創唱セラレタルモノニシテ始テ我國「ポエトリ」ノ真面目ヲ得タルモノト云フベシ然レモ憾ラクハ日尚浅クシテ未ダ汎ク世間ニ行ハレズ為ニ本紙ヲシテ毎月一回ノ発行ニ過ギザラシムルハ遺憾ノ極ト云フベキナリ希クハ江湖ノ諸君陸續玉稿ヲ投ゼラレ共ニ與ニ文學上ヨリ社會ノ改良ニ従事センコトヲ

(但原稿ヲ投ゼラルヽ片ハ住所姓名住号ヲ明ニ掲載アランコトヲ要ス)

一此詩ハ俗曲ノ二上リニ合フモノナレバ欝餘之ヲ試ミラレンコトヲ才子佳人ノ諸君ニ希望ス

明治十八年

目次

昭和十三 五月十六日 第三

西郷追慕の歌　勝安房　号海舟散人　東京人

勸學の詩　東京大学教授　矢田部良吉　号尚今居士　東京人

テニソン氏輕騎隊進撃の詩　東京大学教授　外山正一　号、山仙士　静岡縣人

薄命の歌　吉邨秀藏　号扇岳逸士　鳥取縣人

女子を勵ますの詩　首藤文雄　号一山居士　大阪人

春の花　矢野文雄　号龍溪学人　大分縣人

トーマス、グレー氏の傳　大岡陽太郎　号北溟釣史　山形縣人

英雄ハ人ヽ先ぎるとの海舟勝翁ぞ外山矢田部両先生よ前て既ヽ西詩ハ和譯を試ミられあるおとゝ外山先生ぞ嘗て東洋學藝雑誌ヽ掲記せられたるを見てを知る可きぞり今又翁ぞをのせられある西郷追慕の歌ぞりとて或人よ是寄せらをたれぞ左ヽ掲げて以て江湖の諸君ヽ示さんと才

編者誌

西郷追慕の歌

海舟散人

夫を達人ハ大觀す　抜山蓋世の雄ぞるを

榮枯ハ夢の幻しか
真如の月ハ影清く
何を怒るやいのり猪の
勇みよいさむをやり雄ハ
留り難きぞ是非もなき
若殿原ふむくひなん
諸手の軍打破き
霜乃紅葉の紅おれ
薩摩武雄のをたけひふ
霰たぐしる如くふて

大隅山ハ狩倉ふ
無念無想を觀ぜらん
俄ふげきする數千騎
騎虎乃勢ひ一徹ふ
唯身一つを打捨てゝ
明治十年の秋ハ末
討ちつ討れつ頓て散る
血汐ふそめど顧みぬ
打散る玉ハ板屋うつ
面をむけん方ぞなき

木魂ふひゞくときの聲
落つるが如き有様を
ものふ勇しハ人々や
腕の力をためし見て
いざ諸共ふ塵の世を
唯一言を名殘ふて
宗徒の輩もろともに
心の中ハそ勇しけき
昨ハ陸軍大將と仰れ
たぐひふかりし英雄を

百乃雷一時ふ
隆盛打見てほゝぞ笑み
爰の年以来養ひし
心に殘る事もなし
脱れ出でんハ此時と
桐野村田を始とし
煙と消えしますら雄ハ
官軍ハれを望み見て
君ハ寵遇世の覺え
今ハあへふく岩嵜ハ

山下露と消えはてゝ　移れバ替る世乃中れ
無常を深く感じたゝ　無量の思ひ胸ふみち
唯悄然と隊伍を整へ　目と目を見合を計まふり
折しとてもや吹き下ろす　城山松乃夕嵐
岩間ふむすぶ谷水れ　非情の色もふまとなく
悲鳴もるかと聞ふされ　戎服(よろひ)の袖を濡らしそふるらん

勸學の歌

尚今居士

昔し唐土の朱文公　よに博學の大人(うし)ふぞら

わゞ學問をもゝめんと　少年易老乃詩を作り
一生涯を春乃世れ　夢の如しと嘆きゆまを
國の東西世れ古今　人の尊卑を問をぼして
學びれ道ふ就くとのは　いのふ才能ゆまバとて
同じ多少乃感慨を　起さぬとれあるべきや
春の初花秋乃月　夏れ緑葉冬の雪
渾て此世の物事ふ　心をとむる時ゆらバ
わゞ學藝を省みて　過る月日を思ふべし

池のみぎはれ春草の
軒端ふ茂るきゐの葉は
此年も半ぞ過ぬるを

みどかき夢を覺ぬまに
吹く秋風よさそなれて
ふみ讀む人ハしらぬやな

年の月日ハ長けれど
一夜れ如く思ゐて
螢や雪乃光りふて

難波入江のむらのしれ
わが身の上れゐづかしさ
ふみハよめどを業ふらぬ

昔れ人の學問ハ
唯一ゐぢの道なきと

なほ賢人の嘆きのゐ
枝ふ小枝よ末葉まで

今を學術多端ふて
いのて凡夫の能をべき

さハ云ふをれゝ諺に
海のはゞめハ一ト一づく
心をゆめていつまでを

山乃をゞめは一塊土
いりふ急げど詮ハふし
怠らぬこそよかりけれ

たとひ多くよわたらぬも
身の爲とふる多からん

唯一藝を修めなむ
蜘蛛よ藝あり網をはり

蜂よ能のり蜜つくる
何とて蟲よ及ざざる

勉め勉めよたゆみふく　進み進めちよどみふく
難き事とて厭ふふよ　學れ海よ舟路あり
教の山に志をりぬ　丈夫何ぞ怯るべき

左の詩ハ千八百五十四年英佛の両國土耳其を援けて魯西亞と兵端を開き遂よ高名ふるクライミヤ戦争とふ事此間数多の合戦此處彼處ふ在りたる中最有名ふるもれハ同年六月廿五日バラクラバの戦争ふて英國の輕騎六百騎ぞ目よ餘る敵の大

軍中へ乗り込み古今無雙れ手柄を顯をしたきを惜いかふ衆寡素ちり敵ー難く其大概ハ討死し或ハ擒ふせられ無難よ帰陣ーたる者甚僅ふて而りきと當時英國ふ有名なる詩人テニソン氏ぞ其進撃れ有様を吟味ーたる者よーて何國人ふ限らず苟も英語を解をるりれハ此詩を暗誦せざるふーと云ふ

テニソン氏輕騎隊進撃の詩　　、山仙士

其一

一里半ゐり一里半並びて進む一里半
死地ゐ乗り入る六百騎將ゑ掛ま乃命下を
士卒たる身の身を以て譯を糾をを分ゐらば
答をなをを分ゐらず古れ命これゐ從ひて
死ぬるれ外ハゐらざらん死地ゐ乗り入る六百騎

其二

右を望めバ大筒ぞ前も左もまた筒ぞ
共ゐ打出す砲聲ハ天ゑ轟くいかづちれ
響れ如く凄まドや彈丸雨飛の間ゐを
猛り立てぞ進むゐる死地ゐ古そ入れ鰐の口

勇んで乗り入る六百騎

其三

抜げバ玉ちるやいばをバ皆諸共ゐ振ゐのげて
きらくくと輝け星敵陣近く乗り掛けて
大砲方をゐで切りに最と目冷ーき働きぞ
烟の中に飛込みて烈ーく陣を破るゐり
太刀れ早業見ごとゐりー敵の軍勢たぢくと
遂ゑさゝふる事ゐらば むらくぞつとむらくづき
馬の頭ぞ立直す以前ゐ進みー六百騎
残るたいとゞわはこのなり

其四

右を望めば大筒ぞ　左りも後をまた筒ぞ
共ふ打出す砲聲は　天よ轟くいかつちぞ
彈丸雨飛れ其中ふ　縱横無盡切りふびく
死地をり出で、乘り歸を　鰐の口をり脱き出て
歸るを元の一里半　六百人れ其中で
殘るハいとゞわづのなり

其五

ゐゝ勇しき武士れ　よふ香しき其譽
手柄を永く傳へふん　今のをさふご生立ちて

とる年ゐまた重りて　腰を梓れ弓とふり
頭ゆ霜を戴きて　孫ひこやしやぎ多き時
六百人乃豪傑ぞ　敵の陣へと乘り入れる
そのふる事を語りふバ　末代までも名ハ朽ちじ

左の一篇ハ千八百二十一年北米合衆國（ヴヨルモント）ふ於て起りし出來事ふして或時一婦人其小兒と共ふ人家隔絶の廣野ふ於て俄然降雪ふ冒さ躬ら生命を賭して其小兒を救ひ又其夫ハ救助の人を求めんとて出行きしまゝ兩人とも紛々降り來る

六葉の下ふ空しく屍を埋めたる最と悲哀の情態を詩ふもれせしものなる

薄命の歌

扇岳逸士

骨身を透す山おろし　道ふき廣野凄じく
黒白別たぬ烏羽玉れ　暗夜ふ母と兒を迷れて
わゞのあらく思へゞを　降り積む雪ハ身ふ重く
小兒と母れふとあろに　もやゝねむり餘念ふく
吹き来る風をいや寒く　ふけゆく夜をいや暗く
降り積む雪をいや深く　手足凍えて力ふく

かふとぬ時乃神頼み　潔き心をいのと雪れ
消ゆる命を絶え〳〵ふ　くもれる聲で叫ぶよう
たをけ給つよオ、神を　たゝひ妾ハ死ぬるとも
助けたまへとあれ兒だけ　凍えぬようふーて給べと
已ゞ胸をりマンテルを　取りて胸地ハいらをれつ
めでつる孩子ゞの身ふまとひ　雛を羽ゞおむ夜の鶴
焼野の雉子れ翼さより　暖ゝふりき慈母ゞゝろ
強ひてつくまる笑ひ顔　冷めたきキスも是限り
熱つき涙を淵瀬ふし　其まゝ沈む雪の床
恩愛深き親と子が　永き別れとなり出ず

鐘ハ何處の聲遠く　諸業無常と告げ渡り
牧場ふ求食る瘠狐　最とも悲しく聲をあり
さてそ乃次の朝ぼらけ　旅人此處を過ぎけるに
雪の衣手そがもとに　一人れ婦人横たをり
眼れ中ま死出乃霜　頬をつめたく又かたく
花の姿を残きども　浮世の夢ハ痕もなし
旅人やゞて懇ろに　上衣をとれゞ餘念ふき
小兒ハ見ゆげ打笑ゐて　ゐが慈母ありと思ひしゐ
楓の如き手を出して　乳房をさぐる其さまは
胸も張り裂く計りふま　嗚呼いぢらしき兒心よ

嗚呼深ゐかりき慈母情　何とて神ハ無慈悲ふる

一　女子を勵まを詩

一山居士

勉めを〳〵女子諸君　今ハ昔と異ふりて
教れ道を改まま　三從七去ハ地を拂ひ
男尊女卑の風習も　既ふ大ゐた去りけれバ
諸君も此機を失そゞ　勉めよ〳〵諸共に
勉めを進めよ女子諸君　諸君を人の母なれバ

取りも直さず國の母
其子の爲の幸不幸
亦皆母れ教へより
進めを學べよ女子諸君
教師ハ讀み書き筭術や
人を教ふるまとあらじ
皆ゐさゞるれ罪なきバ
學べよ研けを女子諸君

母れ教のをしへこそ
國の榮ふも衰ふも
勉めを進めよ諸共に
諸君を即ち教師ゐり
其外普通の藝ゐくぞ
能せざるふを非ぞして
進めよ學べよ皆共ふ
諸君聞のぞや又見ぞや

西洋男女れ關係を
同權論さへ唱へゆる
慚る心れなりもせば
健げゐ婦人ハ吾れ一と
彼と我と顧みて
學べを研けよ諸共ふ

春れ花

龍溪學人

(春の景色を)見渡せぞ
花ゐき里ぞふかりける
色香愛(うで)たき其花を
野の末山れ端(え)までも
憂き事のみぞ多かりき
今を盛りふ咲き揃ふ
過ぎ越し方を尋ぬるバ
霜降る朝ふハ葉を隕とし

雪降る夜ふゝ枝を折り　枯きーとまでに眺められ
集り會ふ憂きさとれ　積り〳〵其中を
耐て忍びー甲斐ありて　長閑けき春ふ巡り會ひ
斯く咲き出るぞ愛たゝれ　世の爲ふとて誓てー
其身の上ふ喜れ　花の蕾を憂き事と
知りふば何の憾むべき　春れ花ふそ例ふれ
春の花ふそ愛たけき

編者曰く右一篇ハ矢野文雄君が著されたる經國美談より抜萃ふたるもれあり

片岡易山書

泰西詩人列傳

大岡陽太郎譯

トーマス、グレー氏之傳

抜群ふる英國の詩人トーマス、グレー氏ハ千七百十六年倫敦ふ生れケンブリッヂの大學ふ於て修業せー人ふーて其若年の時エントふ遊び愛蘭土事務尚書の二子ホレース、ワルポール及びリチヤード、ウエストの二氏と最も親密れ交を為せり其後千七百三十九年ワルポール氏と共ふ佛蘭西及び伊太利ふ遊び羅馬フロレンス等ふ於て異邦の花月を賞せーが元來両氏ハ各々其趣味の同じからざるをり交際滑ふふる能ゑぜーて遂ふ其處ふ於て相別きたゞ其後ワルポール氏人ふ語て曰くグレー氏ハ嚴肅ふ過ぎゐる朋友ふり余が常に遊戯を爲もの時ふ於て彼ハ好で古物を探究もる等其心事相異ふりと雖も其行

為ふ於て自ら區別するところあるを以て過失ハ終よ余よりと亦以て其人と為りを知るふ足るべし氏ハ千七百四十一年倫敦よ歸り翌四十二年ケンブリッヂ大學ふ於て民法の初級得業生とふ為り氏ハ此地を以て學藝を研磨するふ屈竟の所ふりとし永く此處ふ留まり彼の有名ふる春の詩薄命の歌及びエトニ大學ハ遠景と題せる詩の如きハ皆此時ふ成りしものふりと云ふ特よ于七百四十九年ふ出版せし墳土感懷の詩（矢田部君の譯詩載て第一号ふあり）ハ大ふ世人の珍重するところとふり其始めて世ふ出しや否や十一ケ所よ於て之を出版せしとの實事より見るときハ恐らくハ詩人よ非るものと雖も皆其絶技よ驚きしならん且つ之を重立たる歐洲十二國の近世語に飜譯せるもれハ現ふ佛國ふ於て見出したるところあるを云ふ（以下次号）

社告

一前金御送附無之トキハ如何ナル御懇意ノ御方ト雖モ差上不申規則ニ御座候

一代價ハ總テ郵便爲替ニテ本社宛ヲ以テ南船塲郵便局ヘ向ケ御振出シ可被下尤モ山間不便ノ地ニ限リ郵券代用不苦候　但シ此際ハ一錢券ニテ一割増シ之事

一山間不便ノ地ニ不有シテ三冊以上御註文ノ節ハ郵券代用平ニ御辭申上候若シ突然御送附ノ分ハ弊社々則ニ照シ勝手ニ一割差引申べク候

一賣捌御望ノ方ヘハ相當ノ割引ニテ差上可申事

一支局設立御望ノ方ハ其趣御申越可被下候

廣告

New National Readers.

●ニユウ、ナショナル、リーダー　第一正價金廿錢

該書ハ米國「ニユヨルク府、バルンス商會ノ出版ニ係リ賞ニ善良ナルヿハ江湖諸君ノ頌知セラルヽ處ナリ然ニ今般頗ル極上等ノ彫刻ヲ以テ翻刻仕リ候間陸續御購求アランヿヲ希望ス

大阪北久太郎町三丁目　辻本秀五郎
東西京三條柳馬塲東ヘ入　辻本文四郎
東京南傳馬町二丁目　尚書堂支店
大阪南久太郎町四丁目　中川自由閣

訓堂　五十川先生撰評

文海一滴

初集一冊二集一冊　定價金各二十五錢宛

和漢簡易ナル文ニ詳細ニ評語ヲ加ヘ作文講習ノ必用書タルハ初集ニテ知リ給ハン二集ハ記文中議論有ル者ト無キモノト又目前事物ヲ記スル者トヲ編輯セル者ナレバ尚舊ニ倍シ劉覽ヲ請フ

心齋橋筋南壹丁目　松村九兵衛
南久太郎町四丁目　森本專助

英國理學博士アルバート　バーテル氏著

○英佛和三國會話篇

上巻洋綴一冊

（英、佛、和、（羅馬字ニテ書ス）ノ三語ヲ單語單句、會話、受取書類、手形類、書簡、及各國度量衡ノ數目ニ區別ス）

（本書定價金七十五錢十一月三十日限リ特別廉價四十五錢郵稅十二錢前金御送附ノ方ヘハ直ナニ遞送ス　爲替ハ南船塲郵便局ヘ）

今ヤ條約改正ノ將ニ近キニアラントス泰西語學ノ必要ナル云ハズシテ夙ニ諸君ノ知ル所ナリ」此書ハ有名ナル理學博士アルバート、バーテル氏ノ著ニシテ原名ヲ「モデルン、リンギスト」ト題ス此書始メテ世ニ出テシ件倫敦ノ紙價ニ影響ヲ及ボセシト云フ又以テ其良書タルヲ知ル可キナリ」倩書肆ノ廣告スル處ヲ見レバ或ハ「此書ノ如キモノアラズ」ト云ヒ或ハ「古今無二ノ良書ナリ」ト云ヒ虛喝百端至ラザル處ナシ妄モ又甚哉弊舗ハ之ニ及シテ他ヲ排スルヲ好マズ其良否ノ如キハ一ニ讀者ノ品評ニ任セ只廣ク世人ノ需メニ應ゼンカ爲メ茲ニ之

レヲ出版ス

東區南久太郎町四丁目拾番地
出版發行所　中川自由閣

日本銀行副總裁富田君編述

銀行小言　全三冊

定價金七十五錢　郵稅金十八錢

右ハ富田君先年歐米客寓中ノ隨筆ヨリ銀行ニ係ル事項ヲ抽出シ近項補正刪定ヲ加ヘラレタルモノニシテ其目次ノ概畧ヲ擧クレハ○銀行概論○銀行重役ノ性格遊興及ヒ反省知能ノ事○銀行家屋ノ事○手代登用法并ニ給料昇級方法等ノ事○銀行類別○精算所ノ事○銀行ノ公義○銀行ノ警戒○其他營業上要領ヲ諸項ヲ論述セリ其行文ハ平易簡明ニシテ用意ハ深切周密ナレバ啻ニ銀行家必要ノミナラズ理財家商業家ニ於テモ熟讀玩味セザル可ラザル書ナリ

東京南傳馬町一丁目　叢書閣
大阪心齋橋筋北久寶寺町　叢書閣

大館先生編輯
改正新板

懷中重寶記　銅版

定價金三十錢　正價金拾三錢　郵稅六錢　小本一冊

此書ハ年中大祭日ノ解ヨリ道中記、諸國名所舊跡、府縣一覽、郵便、電信、氣車、氣船、ノ賃金表ヲ始メトシ專賣特許、條例、諸願届、證券ノ雛形、即紙貼用心得、勸解手續訴狀書式ノ類及ヒ圍碁指南諸進物便覽其他數百余條モ必用ノ事ノミ記載セシ書ナレバ居家旅行ニ一本ヲ懷中シ賜ハヽ世間似寄ノ書モ在レド此書ヲ改正ニヨリ集メタレバ便利無類ノ大新版ト云フベシ乞フ世ノ物數奇諸君ヨ購テ其實ヲ知リ給ヘ

發兌書肆
大坂北久太郎町三丁目　辻本秀五郎
西京三條柳馬場東エ入　辻本文四郎
大坂南久太郎町四丁目　自由閣

賣捌人

洋籍古本急至買入廣告

洋書籍御不用御拂下品多少ニ不限且地方遠近ヲ不問御報知次第直ニ罷出非常高價ニ申受候也

東區南久太郎町四丁目十番地　自由閣中川彌三吉

新体詩林大賣捌廣告

大阪東區備後町四丁目三番地　岡島支店

諸新聞雜誌賣捌所

明治十八年十一月五日　發行

一部金七錢○十部前金六十五錢○二十部前金壹圓貳拾錢○三十部前金壹圓六拾五錢　本紙定價

五号活字廿二字詰一行一回貳錢十行以上及ヒ五回以上ハ一割引　廣告料

新体詩林社

持主兼印刷人　中川彌三吉
編輯人　小川平吉

大賣捌所　大坂府下東區南久太郎町四丁目拾番地　岡嶋支店
大阪備後町四丁目　大齋橋南詰東ヘ入　旭香社